掲載要目

懸賞文藝谷の螢

小蓮女史の
懸賞小説（上）

第六十八、九号

明治廿三年九月五日發兌

美色

と精神●西洋菓子製法●指股の腐爛

紅頬

簡易染物法●床板色付法●言文一致汽車乗客心得●鼠よけ等

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

いらつめ第六十八號目次（明治廿三年九月五日）

●文藝美術…谷の螢（文章）

竹下山人＝南山女史＝本吉みは＝清川やへ子＝水野秀＝松乃＝美少子＝非有非空生＝中村はな＝伊勢太夫＝横山ひろ子＝後樂散士＝橘さち子＝笹川とる＝柳巷＝秋江女＝堀川由造＝藤元あさ＝三坂きぬ

○高尾山紀行（三）…………佐々木信綱

○懸賞小說に就ての感

○懸賞小說（上）…………小蓮女史

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢、四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢○別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢○並別兩製共前金領収の上で無くては差上げぬ事○府内に限り無郵税○每月二回（五日及二十日）發兌○金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局と ある處に 神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事○郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割增しなれば妨げ無い事○見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領収の上差し上ます○廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有

明治廿三年九月四日印刷
明治廿三年九月五日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

本号には

小蓮女史應募得点**懸賞小說**

懸賞文藝**谷の螢**

佐々木信綱氏**高尾山紀行**

文藝美術

第二十六回懸賞文藝應募得點

題　谷の螢

○文章

(イ)　竹下山人(フシマ)

人氣稀なる片田舍。山又山にかこまれて、谷のかずかずひたつゞき平地見るよしもなし。今こそ夏の盛りとて淸き流れもうちかれ、寒き山風もいつとなく温りをおびたり。四方の山も力限り木草生茂り、何處に何物のあるや見馴れぬ目には知りかたし。西山の端にたなびたれし夕霧いつしか何處ともなく流れうせ、鴉の聲たえだえになりぬ。あゝ夕暮！　繩の結び目深山の里の物淋しきかそり涼しさも一ときは。繩の結び目や、朽ち、網代もなかばかたよりし柴の戸を靜かにうち開けつ徐々に庭の松が根に身をよそる人……あら怪し！　綠の髪も光り濃く、顏は色さへ艶けく花の香はうせしさまもなし。あせて此は山中……月の遇はを得たりがほに谷のひまひま左りに右に上下に亂れ飛びかふ一とむれのほたる。澤風に友をそゞして迷ひ來る松葉かげ。團扇に不意をうたれて……たぢたぢ……なへなく落つる二つ三つ——おや大層大きいこと！　たゞそれたりなとはされ〳〵の聲。ほんに思ひ出せばもう五年になるよ。　一二三四丁度十八の夏、しかも今頃であつた。あの邊も螢なんてほんとに珍らしい——少いから。

併し妹の大胆にはあきれちまつたよ。　知りもしない方に一つ頂戴……なんで思へばそれが結ぶの神！　間もなくお腹に……それもよいが顏も見ぬうち夫も哀れ……冥府！　妾も遂に深山のそまひ！……とき〴〵鼻そゝる香。呼吸もせこし。されどいふさけ氣は休まるは人でころ。昔しを忍ぶさま聞き合もそれた共涙。　折りふしやさしき呼び聲かアちやん……思ひしあともうち忘れ、手のもの置きて急ぎ足、かアちやんもこゝぞよ。　早くお出で。　むうも大層よくおとなしくお眠りだね。　あれ御覧！　今夜も大層な螢だよ。抱かれし嬰兒、三つより歳もよも超えまじ。　その愛らしさ。　なぜかなさ。　手をうち擧げて螢と呼ぶにや聲かけつ招くもいといぢらし、。　おまへ螢がすき？　問ひかけし母の心、しるやしらずやうなづくは見る母親は胸に針、なの好た！……聲もいつしか曇り來ぬ。　見えねど涙もれつらん。

(ロ)　南山女史(キイ)

後れ出で、なはれや一つ……とも云ひさき今日此頃の懸賞文……世に合ひさへそれば人に賞めそやさるゝものを身に光添ひあがら育葉にもるゝてふ時季にれ……なゝ谷……谷の螢！　いにしへ人のよそし秋の螢も見處少なし。

(ハ)　本吉みほ(ヒタカ)

斜日谿間寂寞中　滿山楓色萬枝豐　幽情無盡秋風裡　堅葉如花點々紅

これハ是れ父上此山莊よて去年の秋觀楓の宴を御開きなされし時の御作なるよ冬過ぎ春來るかとおもへど今は、や點々螢の飛ぶ頃とはなりぬ。　實よ光陰ハ流水の如き者かなとて、此間學びし業、成せし事幾許かある。日ハ既に落ちて夜となり無數の螢火明滅光を放てるさま美觀いはんかたなし。　即ち筆をとりて、

おのが影にやまよひ寄るらん
谿水の流れ傳ひに飛ぶほたる

折柄父上も此山莊に御出であされ、此歌を御覽なりて徐ろよ宣ふやう折ふれ興をよするハ哲士才女の事よして惡しゝといふべからされども徒に娛樂の料とのみおもふなかれ。　昔し晉の車胤といへる人は家貧しければ油を買ふの資なく夏月ハ螢の光りにて書を讀めりといふこと諸書に見えたり。其苦學如何ならん。　抑も君子ハ義にさとり、小人ハ利にさとると是れ事物に接するの心得なり汝等能く是を記せと終に心肝に記そ。

以上三章無賞

（二）　濟川やへ子（トウケイ）

日はゝや山の端に沈んで暮色凄然……數丈の梢ハ妖怪の佇ずむ姿とも思はれます。　朝からあさりあるいて羽づかれした時の鳥もゝう皆歸つてきて待ち焦れた可愛さ雛にキッスでもしるのですやう。　其嬉しさうな聲ハ……ても此やうな夕ぐれ梢とござさ〱させるのは却て恐ろしいやうな淋しいやうな感覺もおこりさうでも。　木の間をつたはつてくる冷風ハ繁げれる夏草にたはむれて、眺めるとんぼを驚ろかせます。　とう〱と悲しい音のするのは遙に小高い岩のはざまよか、小石よなたる音……琴の音か……さゝ先言か水かゞミして立てる岸の姬百合……わなゝく裏葉からかすかにもるゝ青光り露に宿る雲間の星か世よなきたまのあやし火かても物凄い。　からだもぞく〱するやうです。　螢矢！　食をなさる猴が深山でもないのに何の……草をふみ分けて韋駄天走り。　見れば十一二のわんぱくさかり……あはれ可憐の姫百合もあどけない強い可愛いかひなに……むざん露よりもろき……まアそれ命。

「おい君來たまへ〱」

さとき無心の一聲塒の鳥も驚ろきさうです。　やがてそこにきたのはやゝ十位とそれより三つ四つ兄らしいふたりの子供、

「そりや僕が見つけだんだ。　失敬な人ものと……」

年かさの子供ハ

「君よしたまへ今に又乾度居るにちがひないから」

「だつて僕が……」

言葉の下よりたよ〱とびくる光りあれといひさま帽子で打ち落として、につこり……これであどけない口論も……やがて

て一同威勢よく歌ふ螢の光り。なゝ小供の罪の無さ……此螢も果ハ學びの窓をてらすでしやうか。

(ホ)　水野秀(オホサカ)

あゝわが身ほど幸あるものはまたとこの世にあらぬかし。金殿玉樓ハ一点の塵に染まざるわが栽裡の自然堂にいづれ、山海の美味膏粱に團々たる草上の甘露にいづれ、馬車を塵中に驅り齷齪經營して終りなきは我清閑適意にいづれ。わが身を羨むものこそ多けれ、わが羨むものハ絶えてあらざりけり。　柳陰風清きところに退きて炎帝の民とならず。なゝ幽晩凉を追ひ逍遙すれバ流星いくたびかわれを嫉む。　なゝ幽澗とわが安樂國―　書齋に寓せし故え昔しの物語り………今の此身にはよもや……龍宮の乙姫も、蓬莱の仙客も、わが圓滿の樂み、無量の愉快にハ遙か……なゝわが身ほど幸あるものとてとての世にあらぬらし―

評　螢の綱語に作つたのは手際でしたが、ちと通じにくい方です

(へ)　松乃(シイヘロ)

私のまだ十二三の小兒の時ある日の夕方例の通り山に放してある馬をつれ歸るために東の山へ行きました。いつものあたりと見るにどうしてか影も形も見えません。はて山奥の方へと歩をながらたづねたが居りません。時もやゝたそがれ、向ふの叢の中にあるのは若しやと近づけバ藪であつたり木の古根であつたり心ハ徒らにいら立つばかり。あれころは今度こそれと藪と木の古根とにだまされたのも五六度あゝくたびれたと立ちとまれバ俄に暗くなつた心地、西の方の山ぎはにうす赤いすぢの雲のゝこり、東の方には山又山しん／＼たる森、一時に心細くなりました。すると今まで耳にも入らなかつた溪谷の流れ木だまにひゞきて物すごく、谷ふかく水ハこゝにあるぞと示し顔にてらす螢。深井のある筈は無いと見てゐる中に飛びあるきて廣さを示めす螢。爰が私共の世間ですと云ふやうな仕打れ螢。ふだんなら追ひ立てゝやりたい螢。今それに追ひ立てらるゝ心地、だまつて見てゐると倘々さびしくなるもの、やつと心をはげまし、聲をはげまし歌ふるのは螢の光り、びつくりしたとゝめたれは山びこ、いや何か……とよく聴けバ馬の鼻をならすひゞき、爰に居つたかと打のりて家路にのぼつたことがありました。

(ト)　美少子(フシミ)

「大層遲くなりました……全体今日はあまり暇どつて來ましたから……そら……道もろくにわからない……もう月が出さうなもんだ」と一綴りの言葉にくぎりつゝて話しながら暗さに踏みまよひつゝ谷の蹊道をたどりくるはたしかに二人、

「おゝ澤山なやたるなこと、おやまアあちらにもこちらにも……隨分だ。　ウム鄕の川邊にでもこんなにあつたらよ

からうになア……まア螢だつてそこらがあかるい譯でもないしてゝらにわつてハすでう御坐いますねエ」。暫時く言葉途絶えますと谷の流れが衣を洗ふ許り、石を磨いてゐます。

「すごい……でもうれしい。　ほォたるのひかアりハうはきだねエ。　さつさといきましやうね。　はいよ」。

と威勢をつけた言葉も再び斷れて耳を裂く谷の一と流れより外に音もなく四隣しんとして暗く又凄く、數知れぬ螢が香もなく、音もなくあちらこちらに飛ぶなり。　偶ま丸木橋を踏む下駄音一入興あり氣、それもたえて亦ひつそりとしました。

＊　＊　＊　＊

どうだ昨夕やッつけた。　どれ、

螢火に暗路たどるや丸木はし

以上四章等四等賞

若（十）

非有非空生（トケイ）

若き時には隨分恥かしかるべけれどもどうせ一度は夫持たねばならぬ身。　そなたと妾との對坐ひ、誰に聞かるゝと云ふのでもなし、早く得心の應答して妾に安心さするが何よりの孝行ぞや。　あの七さんとそなたとは能く似合ッた夫婦。　こゝの暖簾と二人に讓つて樂隱居したいが妾の願ひ。　是と如何に何一つ妾に逆ふつて事なきそなた、今と應答せぬこそつらけれ。　其とも七さんと氣に入らぬと言ふのか。　此家繼ぐこと、お敏、そなたは望まぬか。　應答せぬハ不承知か。

奈何に、奈何に？　娘と思ふ眞情から出し言葉にお敏といへる娘はつと兩手をつき、此身をかくまで思ひ玉ふ難有さ、今の仰せ、否應申すべき筈なけれど七さんは……どうぞ姉様と御一處にして下され、母様！　七さんばかりハ妾はどうも……。　七さんばかりとハ、そなたハ厭と言ふのか、嫌ひと言ふのか。　何とした事ぞ。　今の世に稀な優しい姿、心も顔と同じく優しく、學問もあり、身も堅し、中々得難き夫何を不足にそなたは嫌ふぞ。　成程お富はそなたには義理ある姉なれど、吾娘可愛さと渾ての人情、此家をそなたに繼がせたき妾の望み。　お敏！　よく考へて見よ！　此暖簾是非とも七さんに繼がせねば親類中の者が承知すまじ。　其れをそなたが嫌ふて見よ。　そなたは外へ行かねばならぬ妾までも肩身の狹くなる道理。　こゝの道理を酌みわけて得心して貰ひたし。　是でもまだ厭か。　不得心か。　え、母様！　不得心で御座りまする。　なまふ、不得心とは。　堪忍して下され。　妾は……あれ文……さんと堅く約束致しました。　えッ！　文さんと？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お敏の望叶ひ、間もなく駿河臺の文さんと高砂謠ふ前に並

びも、共に顔に紅葉を散したり。　義理ある姉と呼バれしお富と七さんと共に是も目出度遠州屋の暖簾とつぎ、中睦じく暮しぬ。

お敏ある日人の居らぬ隙を窺ひ、守袋より一枚の寫眞そつと取り出し、暫く見詰めしが果は露の雫一つ二つ寫眞の上にふり懸りゐると慌てゝ袂もてふき、ほつと溜息、見れバ如何に！　七さんの寫眞！　何として守袋に藏し置くぞ。　嗚呼言ふもあはれ！　人こそしらね谷の螢――の身と焦せしも月に雲――義理の柵。　戀しき七さんも其心知らす、母も知らず。　近所にて能く繼子のお富に家つがせしものと母親の評判よろし。　思へバ浮世！

評　谷の螢といふ題にしては殘念ながら三等の價値です。
題がなけれバ二等の價値です。

（り）

中村はな（イセ）

燒

燒くと思はれる熱い日影の名殘も早や褪めてからまだ間もありませんが朦朧と見渡す麓の樹々今日と晴きと彩つた若葉の緑色も今は黒く見えて墨色の見えです。　只意地惡く臂張つた老樹時々うそぶく夕風が響いてといふのも凄じいが、あたりに響く樣な肌吹く涼風、涼しいのも余り度が過ぎるとなんとなく物寂しいものです。　それに飛びかふ無心の螢人に近づいて來るのも可笑しい。時を得顔に繁つた水草、其蔭に草の露を光と爭ふてこの寂しさを輝してゐる愛らしさ。　わゝ露を命と頼むはかない身も僅か浮世を樂んでゐます。　おかし思へバ世の人が血の涙を以て償ふ快樂もこの廣い大きい世界から見れバ……

（ヌ）

伊勢太夫（イセ）

あゝ思へば去年の夏なりき、われ脚氣を病みて長谷山寺に假居せしは。　ある夜われ高く山の頂上に涼を納れたりき晝の暑さの殘りを掃はんと。　とばかりにしてまた歩を谷の方に向けたりき、清き泉聲を聞かんとて。　既にして谷近く臨みしがときに數点の夜光を認めたりき、光り輝く。　夜光ははや數十とありたり、われ數歩を移せしときには。　六歩七歩谷を下るに從ひいやまされり、面うつばかりに。　四方ひとつらに夜光とありたり、泉聲近くありし頃には。　われ、あゝおもしろしと腕ひんまくつて掬一掬、その甘露を想ひ起す妙味。　おきころび岩角に踞して眺む、杉の木の間を漏れくる月影のみだれ飛びかふ夜光と相輝映し、われに述懷せしめんとするの樣子ぞ。　然れども思へバいとをし、あへらぬことを繰言してこの愉快な夜をして悲慘な夜と化せしめんもまた思へバわれも大胆なりき、あの人里遠くはなれたる深山幽谷に涼を納れ夜光をたれしむとは。　思へど物凄くありぬ、笑顏と見えし月影も今はね光るに似つゐかぞ。　思へバ物哀れにありぬ、これとて本は腐草なりしが今かくわが目をたのしませば何ぞ本身の腐草を責めんやとこの氣に入りし夜光も

今は無常に先人の迷魂かと疑ひ。思へば氣味わるくありぬ杉の木立も吹く風も瀰る泉も流るゝ音も。あゝ卑怯！あゝ臆病！一氣をはげませばさすがわれとて萬物の長、などおそろしきものかある、もはやこの谷に、否寧そひろくこの世に。茲に於てぞわれ悠然、岩頭を枕にし、萋草を茵とし、仰臥夜光を吹く。あゝ丈夫！わが氣も亦えらいかな。呼吸の餘聲天に達せしか浮雲驚き出でたり。月われの氣に怖ぢたるかいつしか身をその間に投じり。斯くなれバわれまたこれを攻めんも及バず。われ歯がみして腕をしごけば夜光驚いてはつたりと落つる數十。われこれを帷子に袂に包み、目を瞋らし、空嘯いていふ、卑怯々々あゝ卑怯！汝夜の女王わが臀肉を食へ、われハ謙信が食塩を受くべしと悠々洋杖をつゑつき、路をてらして寺につく。

評　文氣凜然、しのし倒句を以て全篇とはされたのは奇と好んだはおしです。

(ル)　横山ひろ子(ヒカ)

郭公入里にてこそ聲としむらめ、深山には忍びねもらすてともやと友のたふたり三人かいつらねて谷道つたひ、足引の山おしわけてそこはかとなく尋ねしか、聞ゆるものは岩ゑしる水の音のみ、杣人のおのゝひゞきのみ。山彦の外絶えて答ふるものともなし。兎角するほどに日もはや西に入相の近頃く成ぬれバ今ぞとて元來し道に引歸し、足早にいそぎぬれども餘りに深くやわけ入りけん幾ほどもなく日は全く暮れ果てぬ。さらでも暗き谷の細道いかゞはせんとたゆたふ折こそあれ、こゝかしこの木の間より數多の螢飛び出でゝ、さしもに暗き谷のげのくまも殘さず見え渡りぬ。昔し車胤といふ人は螢をなつめて書を讀み、聖りの道を尋ねしと聞つるが、それにはあらねと我々にともす螢をよすかにてかくまで暗き谷あひのかなをば道をふみも迷はず容易く麓に出にけり。そも此虫はいかなれバ古より人を道にみちびきけん。またこれくしき虫ありかし。なそれ造物の神のこゝろを用ゐることの深きよのつねの淺き心もて測り得べき事かは。

後樂散士(ナカ)

(ナ)

晝の暑さも日がかくれたゞけ涼しい樣な氣がするものゝなか〳〵家には居たゝまれません。誰れも彼れも團扇片手に涼み臺へと腰うちかけ、逢ふ人毎にどうもお暑う御座いますとは何より先に出る挨拶。斯ういふ時にこそ片田舍にでも引込んで青葉通ひの風に身をまかせ、山の端近く湧出る淸水の流れでも聞いて居る事なら嘸ぞ淸々することだらうと思ふ都人の心。それを知つて住むとも思はれぬ茅葺の一軒家。内より出で來るのは十五六の娘につゞくのが多分妹でしやう十二三の小娘です。時ハ丁度八時二三十分頃、三日の月も早や山の端へと宿を求めました。が、賴もしいことには天蓋一面の星は邪見の雲にもつゝまれず、不相變の笑顔をひか

らせて道案内としてゐます。　隣家といつても五六町も行かねばならぬ田舎路を晝あかりはあるもの〻提灯もなくさつさと歩む娘は何の爲めに此夜路をとるのでしやう？　家をでる前に母はいひました――父さんを招びに行つておいで早く御歸りになる樣に…………二人は此命令の使者なたつたのです。一歩は一歩と隔たる我家、逢ふ人とても格別無いのです。たゞ幽かにもれる燈明、彼れが父の居る家かと思へば幾分か心强いもの〻ころのさびしさは都人の心にはとても想像外のことです。　まして夜路をせをすることが…………妹は歩行をゆるめました。　間もなく！

「姉さん！　あれあすこに光つてあれ…………」

姉は指さす方へ視線を運ばせました。　が、そこし笑ひながら、

「何だと思つたら珍らしさうに何時も見て居ながら…………」

「姉さんそれでも今光つたのは何でしやうあの谷のわきで…………はらまた光りました」。

「おや否な人が彼れは谷間の螢だわねエ」。

谷に飛ぶ螢も道のしるべかな

（ケ）　　橘　さち子（トウケイ）

月わかく風もなけれどそゞろありきせんと門に立ち出で空打ちあふげば月は中空にのぼりていと面白く、いさら小川の流れに添ひて月の行方へうかれ〳〵ゆきつゝ、思ふ樣、

今宵は水無月の三十日にてむかしは月もなく殊におのゝし〻もかたばかりのみそぎせしにあすの川の流と世かはりて、その事もたえなりければむかしの人のいひたりし

　葦原やほたるかゝやく神までも
　　とびちるはかりとらへすつあり

此歌は心と今の世の子らは何の事かと思ふらめ、螢かゞやく神はよからぬ神にてましませばあしき神とてらへすつるといふこゝろの歌なれど御祓の事を知らであらん子らさへよをしへまほしあと〻思ひて、谷川の流れの岸に來て見れば、月は水の面にかげとめ、岸の柳にふく風涼しく、蘆の若葉茂りて折しりがほなるもにくからず、その中よりひらきらめきて、飛び出ださせし螢のめづらしく、うれしと見るほどにあまたつどひて谷川の水のうへに目さましうとびかふさまいはんかたなくおもしろく、一人立つくすもあはれにをかしうなん。

（カ）　　笹川はる（イガ）

大路の塵それも今を夕立に洗はれて、黄昏の涼風がそよ〳〵面を拂ひます。　兩側に立ち並んでる氷店、その紅提灯は景色よく客を招いて涼しさうに夏の夕暮を現はしてゐます。見れば紗籠幾十となく荷ふて今一際夏の夕暮を涼しさうに見せるのは螢賣りです。　螢――此うちには漆塗の臺に眞紅の紐結び付けた紗籠の中に天門冬の露甘さうに吸てゐるその果報。　あはれ銀貨幾粒に身受けされて何某の高殿の軒端に御

伽奉公つとめるでしやう。　あゝ今これを見ると胸に浮ぶのは去年ハ今頃山峽の孤家よ宿つた其時の事です。
山家の夏ハ夕暮これと都とハ又格別の相違、さびしさは一面、蚊遣火の煙さへあはれを添へてゐます。　さア散歩しやうと團扇片手よ溪河に沿ふて歩むこと二三町許り、はや此時と日も西に沈んで天地寂寞我と我身ハ浮世と離れた樣な心持云てゝ塵一寸ハ汚れもなく、功名利達其在家さへ我胸の中よハ跡を絶ち我れながら茫然自失してゐました。　忽焉！　一團の螢火岸草の茂みから閃めくと見る間に發矢！　碎くると幾千ハ星宿飛び違ひ、入り違つてハ波にもまれ、艸に陰れ、上る者ハ柳の葉蔭とあつて、下る者は筑紫の不知火とも見える風情！　あゝ絶觀……と暫らくは見惚れてゐましたが、山嵐の氣涼しさよ氣を付けられて、其れで足を廻らしました。
嗚呼螢！　其境涯も樣々です。　谷の螢は斯くも奇歡絶歡であるよ見る者とてハ偶さかな艸苅る童かさもなくバ樵夫！　人にも知られずして空しく谷間よ朽ち果てるとはさても不便これを彼ハ紗籠中に養はれて、いとし大切がられる者と比べてハ月鼈雲泥の差です。　が、然し螢に取てハ孰れが本意でしやうか。　人ハ賞讚を受けて紗籠の中に幽囚の身となるよりハ寧ろ浮世の塵を嘲つて心長閑に一生を谷間に送る方が―遙か増しでしやう。　して見れバ谷の螢ハ隱君子陶淵明ハ亞流とでも云つて好いでしやう。

（四）

柳巷（トウケイ）

なだれ來る道の緣もいつか切れて、出たり引込んだり我儘な岩が並んでゐるバかり。　言ふにいはれぬ冷氣が慄々として我々を襲ふやうな。　紗籠と團扇を持つてゐる同伴三人岩角よ立つたまゝ恐ろしい亂雲の間からのぞきおろす月を脊負つてたゞ茫然、　前ハ即ち底の知れぬ谷です。　たつた一点の螢火を趁つてこゝまで來た愚かさ。　しかも其目的を見失しなつて。　最早や先きへは行けず。　行けないとなると何處やら行きたくもなる。　岩角を手がゝりとして摺り下りやうの？　否先きの知れぬところ、まして岩よハ千年の苔蒸して、濕り氣があつたら直ぐさま滑らせやうといふ勢ひ。　抱きついて腹匍ひよ下をのぞく。　のぞいても月ハ雲よ蔽はれて暗々目にとまる物もなく、　深底よ潺々と泉が岸を漱つて流れるやうな音がするバかり。　それもいくら深い處やら……考へれバ考へるほど遠く聞えます。　あきらめて起きあがる身構へ、發矢！　一團の烱星が飄々と輕く飛び出しました。　縱橫自在離れ憚からぬやうです。
嗚呼此螢――一個の螢！　純潔ハ空氣に其心骨を洗ふだらう。　鮮好の甘露よ其生命を延すだらう。　淨澄の寒泉に天理を知るだらう。　幽情の明月よ無情を悟るだらう。　燕雀に窘しめられることもなく、氷統に追はれることもなく、燦光を放つても誰れ奪ふものなく、千萬の快樂を一身に集めて

憚りません。　滿谷皆我物。特に小天地を形造つてゐることの羨しさ。思はず躊躇して螢と共に自然の美を味ひました。

以上八章第三等賞

（ヌ）　　氷野　秀（オホサカ）

團扇携さへ下駄おとひく、脣に微笑を漲らして、いとしとやかに訪ひ來りしはお蓮孃でした。

「伯父さんお納涼ですか。今日もお暑うムりましさ」。

「お蓮さん入らつしやい。伯母さん獨りて涼んで居たんです。さアおかけなさい」

「はいありがたう……えゝしまつた伯母さん」

「おや危いよお蓮さん螢を追つて……罪も無いものを……」

お蓮孃は二三匹捕つて、

「紙……が……ない……伯母さん………紙……」

「紙よりはね、葱がいゝよ。茄子の向ふにある大きいのをおとり……」

「はい……なゝ嬉しい大きいのが出來ましたよ。伯母さんちよいとて……これそッ……」

「いやです……臭いから……」

「あつ……わアびつくりしたよ」

「どうしたのお蓮さん。妾までびつくりしましたよ」

「伯母さんといつて……蛙と踏んでギユウといつたんですもの」

「な……いやおよしなさいといつてゐたのよ……」

「伯母さん！　伯母さんの子になりたいワ」

「なぜ」

「なぜつてまア伯母さん……谷間から涼しい風が好きな螢をたくさん吹いて來ますからさ」

「おほ……伯母さん嬉しいよ。お蓮さんが子になつてくれたらおほ……」

「伯母さん笑つてはいやです」。

お蓮孃は「お休みなさい」といつて歸りました。さてもあどけなき子供ほど愛らしいものはない！　清き流れを飛びかふ螢に心を奪はれて……お蓮孃は蓮の生れかはりであらうのあれ清潔りとした心があるうちは……

評　あどけない極度、處女の眞髓。

（レ）　　秋江　女（トウケイ）

「おしげさん是から山の方へ涼みにいらつしやいな」。

「はい參りましやう。夕方は余程涼しくありましたね」。

「さうですね……まだ月はあがりませんのね」。

「はい宵やみですよ……宵やみは道たど〳〵し月まちて、はゝ、」

「はゝ、相變らずみやびな事ばかり」

打ち連れて庭の折戸口から二人の少女は山の方へ袂つらねて行きました。

「おやもう谷ですね。　ならまア御覽なさい星の影が水よ……どうもいゝ事」

「眞實にいゝ景色ですね……いゝえなれは星ぢやありませんよ。　螢ですよ」。

「はゝへ星ですよ……ならあぶない其樣な橋を渡つて」。

「でも貴女が螢ではないとおつしやるから取つてお目に掛け樣とおもつてさ」。

折からそよ〳〵岸の小草と渡る風に谷の光りもちり〳〵に亂れとびました。

「そら御覽なさいはたるですよ」。

「はゝ、星だつても貴女飛ぶ事が有りますよ」。

「はゝ、まア御しげさんの情の強い事」。

「おそいとはへば余りおそくならない中にかへりましやう恰度月もでましたから」。

評　傑作です。

（ツ）　堀川田造（イガ）

名よし近江石山の螢球といふ時も見過せしこそ殘りとしくれ。　されど今年七月の始京に上る途次とて計らずも此里に旅寐の夢を結びしことなり。

夕風比叡と下りて湖水よ思ひぬ漣を漂はし、勢多の橋も何時しか轟く駒少くありありては蜆漁る船も岸と急ぎ、あはれ石山寺の鐘徒らに水禽を騷がしける。　元より單旅の事にしなれば徒勞と慰むる者さへなきにまして山里の夕は果敢なる昧目のら知られて往末の事など思ひつゞけぬ。

さるを何事ぞ實北よ疾しと見る間に夕立、果ては雨晴の塵を拂ひ、なかれ勢多の流れも暫時なつて砂礫に色彩られぬ。今は〳〵や今宵の月に望みもなく、殘螢といふ名も覺束なし、と心よ諦めては石山寺の鐘に打ち出され、鐵橋を軋しる車の笛に又呼起されける。

旅館の前になれ〳〵と叫ぶ童の聲、何事の起りしにやと思はず欄干へ出づれば珍らしこれは螢を透ふと覺し。知らぬ間に雨晴れし綠火遠ち近ちにさまよひ、天上の星地に遊ぶかと疑はれぬ。　見渡せば柳の蔭よ露を貪り、或は闇を破つて軒下に流れを汲む。　怪しや其至る所露は綠の玉となり、氷は綠の流とある。　蘆に眠るもの蘆よ醒まされて迷ひ、逆旅の樓上に畫額の花と眷むるものなり。　然れ螢は猶は闇よ咲く花の如し。　其風の爲めに散らず、雨の爲めに落ちざるに至つては花の及ぶ限りにならず。　花は胡蝶に媚びを呈せることなれども谷の螢は塵を避けて人の愛をも強ひて乞はず。元より梅の香はなけれど其光闇を照らして孤客の途しるべともならん。　まして花は園に滿ちたりとて未だ淸貧の士之と用ゐて書を閱したるを知らざるとや。

覺えず感慨に沈んで夜風の寒さに思ひ出せば童の影知らぬ間よ消えて聲なく、旅館の灯只冷かに燃ゆ。　深更自ら目醒

めて窓の月に驚ろき、欄干に立ち出でゝ江州石山の名物二つ共に眺めぬ。

（ツ）　　藤元なさ（サカロ）

窺へば千尋の深さ。　いぢくねた松の臥龍を學んで、右にも左にもいかめしい幾百の巖と其處に蹲る虎を描いて此處あもまた、岸の崩れて痕遠く雲の漲つて底晴し。

「もし旅の衆、此處の蛇谷と申しやして、昔大蛇の棲んで居つた谷せそ。　それ〳〵恐ろしい深い谷せすよ」。

「さうだつたらう此深い鹽梅では……あさちやん能く覺えておいでよ。　蛇谷と言つたら此谷の事だと」。

「おゝ怖は。　妾も脚が震へまそ。　おや兄さん！　螢が……それ御覽澤山山を点してゐますわ」。

「旅の衆、さア早く行きやしやう。　日も暮れやした。もう姑くの辛勞です」。

あの螢、ても恐ろしい蛇谷の中み何の樂しい事が……何故早く江の邊へ飛んで行かないの？　風の涼しい潤やかな江の邊にゐてこそ歌にも詠まれ、そして巳が壽命も延びるといふもの……それに風も通らぬ雲も凄い中でなゝ何が樂しい？

「あさちやん何を仕てゐるのだ。　早う行かんかや」。

「でも兄さん螢が……」

「螢の如何した？」

併し心に適へバ如何なる處よも樂みの有るもの、心よ適はねバ如何あるでとも渾て不愉快なもの。　涼しい風ー清らかな水ー明かな月ー玉のやうな露ーそれとて心に適はぬ以上の決して樂みがない。　あの螢、蛇谷の中にゐても心が適ふれであらう。　陰氣な處も清凉と思ひ、そして窮屈な中も廣濶の處と思つてゐるのであらう。　さればこそ彼の樣な恐ろしい中も構ふも遊んでゐるので……

「孃さん早うお出でなさゐ。　もう直せそ。　あ、余程お疲かさらしい。　どれ私がお手を把りやしやう」。

「いゝよ。　あの何だね蛇谷に澤山螢がゐましたね」。

「螢ぐらゐの何處にでも……蛇谷よ限りやせん」。

「は、、、」

（子）　　三枝きぬ（サカヒ）

幾本と無う立茂つた杉檜、其梢の上にのみ渡る山風に折有つて羽音のさは立つと宿鳥を眠ふ梟かそも叉鷲か。　片破の月と夜露に濕ふ袖に宿して、一枝の杖倚も溪水に沿ひながら小笹ともいはぬ落葉ともいはず、分からぬ谿を掃ひ尋ねて運んだ幾歩ぞ。　苔よ朽ちたあやしい橋を渡つて此方でちらり！　目よついたのおぼろげな山氣の中にー一点の火。

此處の鎌倉三代將軍實朝卿の姫君を祭つた處、誠實朝卿の

人知らぬ日蔭に一人の姫君が有つた。　年端もいかず、かてゝ女性の身、涙に恨の袖を噛むより外のことは仕出せぬと云つたつて仕出せぬに、しかも猶虎狼は「忘るな」と誓つた人も誓れた花もおれが思ふまゝ公暁が闇に閃めかした大刀風に敢無く散ッたに懲たらず、其饕餮の牙を姫の身にも移した。已むを得ぬも情ある―それも乳母。其爲に山に脊におそれ、野に手を曳かれ、やう〳〵逃れて此深山に御足留められた家が今の此庵。あれ古金襴の紋ぢらし、猶苔を忍ぶに余りある形見の色！　色しほらしい笹りんだうの花衣身に纒ふて、桃夭々の十六才頼みある隣國某の君へとつがるゝ明日といふ今日、心無い時の疫のため……あゝ、一たびの目に立つ春にも待遇れず、空しく香魂を草深く木闇れ間に埋ませたまふたとはそも何の業因か、翠簾紅閨世が世ならば露吹く花の風にもあたらぬ其身が……幾十年かの祖先が刃に血塗ッて得た經營も徒らに「人のために嫁衣を纏ふ」の譏を買ふた計り、おもふに「山も裂け海もあせなん世ありとも」姫が綿々の恨も……

火を認めて立寄つたは一ヶの庵寺、眉雪の如き老翁が坐ろ七百年の春や昔の物語り。流離艱難つまされた身のことが、それ聞渉る嵐に向ふ青燈諸共涙の目としばたゝくせに居られやうか。　分け與へられたがむしろの半坐も寐つかれぬまゝ起つて戸を推せばちりかふ三つ四つ―谷間の螢。　あゝ其聲たてぬ思―燃ゆる、それすら人には知り得られぬ果敢無さ―ことぞ昔の姫が緒の絶えた恨の玉の。

以上五章第二等賞

高尾山紀行（三）

佐々木信綱

ふく風のおとにかよひて四の緒の、
瀧の調れ清くもなるかな、

狂人なるべし、人に手ひかれて瀧にうたれゐたり、此瀧はさる病によしとあればありとぞ、あやしかりし家は此狂人のゐるなりときければ、何となくむくつけきこゝちす、もとり道をのぼりて左の坂路を下りゆく、山の片そばに桑の木又畑つ物植たる所多く、こゝかしこに家ゐもあり、てる日のいとあつければ、

あへぎつゝ山路下れば山ぞひの、
さとふく風も嬉しかりけり、

ゆくてにいと大きなる榎あり、谷間に枝ひろごりて、いく百年の經にけんとぞおぼゆる、かくて草川堤をつたひつゝ、もときし高雄橋の橋づめに出るに、待せつる車待ゐたり、のりて古奈路の花屋といふにいこひてひるげす、こゝより今日きつる道なれば、珍らしげなく、かはりたる事もなきに、暑さのみ今朝よりいやましにてゆきし時には似ず、八王子につきぬ、此里は鮎の名物なれば、家づとにと思ふに、夕ぐれならでは

こずゑはいふ、いとはいなし、けさの道をかへて裏の道をゆくに、新しくたてる家多し、又いまたひらかぬ勸工場あり、八角につくりていと光つらし、滊車のいづるはいまだしければ、停車場は前ある樓にのぼる、風いりていと涼し、高雄山もみゆといへば、双眼鏡にてみるに、なごの光いひしらず、さて五時半の滊車にのる、まばしゆくに夕立ふりきぬ、山にてふり出あましかば、いかにわびしからましといとうれし、

　をち方に夕日の光みえながら、
　　此わたりのみ夕立のふる、

玉川と渡る比、夕立の洗ひ流しゝ空よ、入日の光いと清うみだゝれ出たり、なもつる人いと涼しげにてこゝかしこにみゆ、われ三人ともに暇なる身あらましかば、今夜は日野にやどりて、明日あゆつりて歸らましさとかたみにいひあへり、立川のわたりにて、不二のね足つかに見ゆ。

　心ある人にみえしとふじのねの、
　　そそばかりにて面かくすらん、

新宿につきしは七時頃なり、けふはりきしはくはせの道にもあらで、さのみつかれたりともおぼえねば、こゝよりかちにてゆく、此里の家々より我妾の田舍人めきたるをみて、はしための、旅やどりもとめたまへなどゝ、むるいとおはし、けふのみの旅なれど、歸る家路は何となく足かろき心地して、八時すぐる比ゐつきぬ。

（とはり）

懸賞小説についての感

一　三ヶ月前から廣告したのに應じて愛讀者は眷顧ふかく前號に豫め記しゝとほりは大數を以て幾種類も寄せられたれは甚だ吾々が滿足に思ふ處です。投寄の草稿はいづれも上出來の方、冒險でやつた方が大抵少いのは最も喜ばしい事でした。其今概要を引つくるつて言へば。應募諸君が少からぬ文才をいつれも有せられた事、これが吾々をも誇るところで、つゞいて一二は遺憾もありました。第一は題と墨守し過ぎて小説といふよりはむしろスケッチと言ふ方に近い物をこしらへ、題に出した景色を以て全篇を埋めた事、即ち言ひ換へれば、題意の前後は趣向を加へなかつた事、これが應募者にまだ不熟練である故とは言へ、大に惜しいことでいくらか見る處も有る作ながら其ために活氣が乏しくなり、終に一等に拔けなかつたものが澤山ありました。第二は下等の愛情を書いたこと、此方がそもそも多かつたのが玉に瑕でした。集まつて草稿各種はうち十は九はこの方で、題の少女が人を戀ふとか戀はれぬとか、それも純潔な愛を以てあら格別、たゞたゞ所以も、思想も無く書き流したのが多かつた事でした。第三は文章、この方は前二ヶ條程ではは欠点も見えず、概評そゝ處まづ上出來の方でした。その中でもつとももさしぬくたれは即ち左に載せた小蓮女史の作で、其文章、思想、あらびに脚色よ至ッて天晴好模範を備へました。今

号から之を連載します、どうぞ宜しく御熟讀して見て下さい。雑誌に出すのは一等賞のみですが、今これに次ぐべき物を名だけ擧んで出せバ左の通りです。 但し小蓮女史は當人から匿名の御望みもあり、其他は同しくいづれも略して載せました。

(等数)	(受取月日)	(題)	(所在地)	(姓)	(号)
第一等	八月十六日	無	京都	藤	小蓮女史(十七年六ヶ月)
第二等	八月十三日	白菊	岩代	鹿	松乃(二十年)
同上	八月十四日	無	信濃	小	後樂散士(二十三年)
第三等	八月五日	八重椿	東京	富	はま子(十八年)

右のとほりで第一等の方にて豫告のとほりの賞品と差し上げます。 猶これと同じ例を以て第二回の懸賞小説を募る所存、何とぞ倍舊の御奮發と以て折角御推敲を願ひます。

懸賞小説

小蓮女史

わたくしは當年取つて十七年六ヶ月の少女、世の中の風には曾て逢はせ、親ごゝりと猶頼みにして好むまゝの小説三昧に折り〳〵は學びの鬱を晴らし居ります。 ことに美妙先生の御督監なさるいらつめは豫てから愛讀いたし今までに皆さまの金玉の御文章拜見して座ろにうらやましう存じてのみ居り、懸賞小説の御もよほしに身の不肖を忘れて終にこのやうな墓無いものを列ねました。中の事實といさゝか種の實際にあつたのと又聞して取り合はせました物、これでも小説と申せるかは存せずたゞ〳〵美妙先生の御目を賜われバ本懐のいたりと存じます。 決して〳〵一等を得やうなどの望みこれあるのでも厶いません。たゞ万に一つとりあげ〳〵でも爲りましたら何とぞ本名だけを御包み下されますく、只今學校にまゐる身分で同級の方にも御かくし申し居りますることゆゑ何とぞ〳〵この處は誰が尋ねても御かくしの程願ひあげます。 題はどう付けて宜しいかさッぱり分かりませんゆゑあしからず御ふくみこれ又願ひあげます。

(上)

「わゝらア、阿孃さま、よウ阿娘さまわたくしは……わたくしは…どうぞ花とも不便と思し召して……」

とばかりで言葉の緒はぶつり、かすかに聞ゆる歯をくひしばッて泣きふるへる一人の老女、乳母といふこしらへで疊に顔を付けて居ました。

「よウ阿娘さま、さう御泣き遊ばさずと、わ…わたくしが及ばずながらも……」

「ないよウ」。同じく泣き聲でおよ〳〵乳母の涙を添へるのは令娘の秋子でした。

「花乳母がさう言ッてくれるからわたしや…わたしや…死にや…………しないッ。乳母ア泣いて御くれで無いよウ」。

「そイ阿娘さまさへ…わたくしハ泣きません。よウ阿娘さまそりやア御くやしうムいましやうが、もウすこしの所でムいます、どうぞ御氣を取り直して。阿娘さま、貴娘が短氣なことなど爲さいますと、花もだまッては居りませんよ、花も…花…はイ、いえ、泣きはいたしません………花も死…死ん……」

「又御前」。

「は…は…はイ、つひ。いえ本當でムいます、もすこしの所で、もすこし御辛抱でムいますから、どうぞ、ね、阿娘さま、決してわるい御了簡など御起しあそばされずに」。

上もなみだ、下も涙、なみだにかき暮れて應答して居る主従二人、その素生そも〳〵何です？

素生—と言ふよりはいッそ涙の物語り、不足無い身に生まれて世に類の無い不足を味はふ薄命の人が世には有るもの。乞食にも劣つて可哀さうなのは即ち今の令娘でした。ことし其年は十六歳、人間の花こゝに蕾を破つて今からが半開の微紅に才子の心を蕩かすといふ頃、あはれ其微紅も憔悴してあをざめるほど、天成の玉はさすがに慘雨愁風に逢ひながら艶の殘るところは影のやうに髣髴として見るからが哀れでした。母も人前に出て肩身のせまい祇園あたりの藝子あがり、國世と言つて玉顔を複寫の寫眞に鬻がれた果て銀行の何某といふ若才子に引かされて東京の風をハネームーンで始めて吸ひ、國子といふ娘まで儲けて面白をかしく暮らしたのもやうやう六年、夫ハ商用で蘇の國へ行く途で難風に逢ッて海底の藻屑となッて仕舞ひました。それから母子ハ途方に暮れましたが、國世の容色ハ今も師直の目を免れず、二十七八といふ年もふけてそれが二十一二に見えるといふが運か不運か、たちまちに大坪といふ奏任官の内方に懇望されてあやふくふみはづす足をとりとめたのは即ち國子が五歳の時、國世が厄年に五年足らぬ時でした。